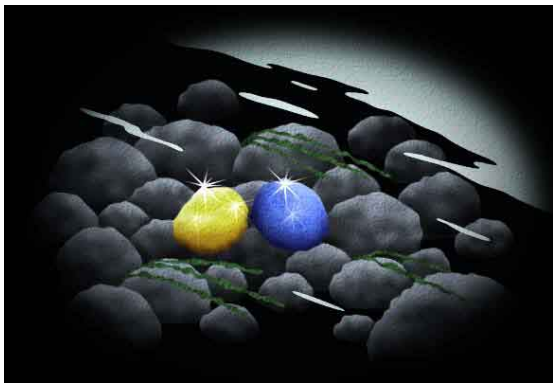


神話スライド s e t シリーズ

はくちょう座

スライド枚数 : 16枚
時間 : およそ5分から7分
イラスト : 三善 和彦
高部 哲也
※ 音響テープあり

LIBRA CORPORATION



1.

それは、神と人間がまだお互いに行き来していた頃のことでした。

エリダヌス川のほとりで、仲良く遊ぶ二人の少年がいました。

一人の少年の名前は、フェートン、そして、もう一人の少年の名はキグヌス。

フェートンは、兄のように体の弱いキグヌスを気遣い、二人はいつも一緒だったのです。

2.

ふたりの宝物は川の中で見つけたきれいな二つの小石。

黄色い小石はフェートンが、青い小石はキグヌスが、それぞれ肌身離さずお守りにしていました。

+音変わり

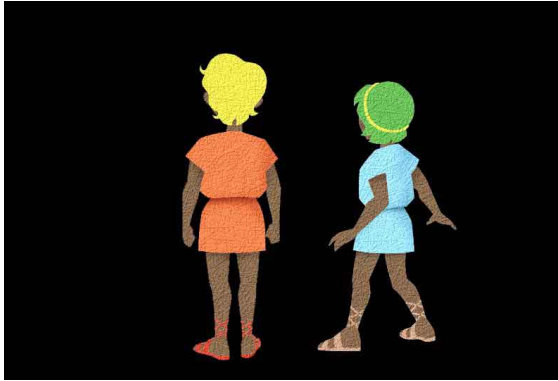
3.

ところが、ある日のこと。

いじめられていたキグヌスをかばったフェートンは、少年たちから「うそつき」といわれてしまいます。

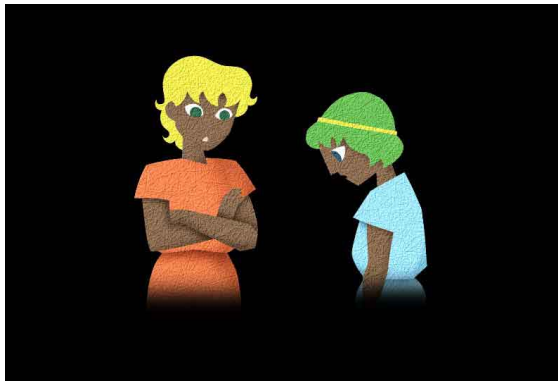
実は、フェートンの父親は、太陽の神アポロンでした。しかし、それを信じていない少年たちは、ことあるごとにフェートンをうそつきよばわりし、反論するフェートンに「本当なら証拠を見せろ！」とせまっていたのです。

とはいえ、証拠などあろうはずもありません。



4.

少年たちは、立ち去り、あとには、黙り込んだフェートンとキグヌスをだけが残されました。



5.

「ごめんね、僕のために」

あやまるキグヌスにフェートンはこう答えました。

「君のせいじゃないよ。

でも、あんな奴らに馬鹿にされるのはもうたくさんだ！

僕は、お父さんの所に行って何か証拠をもらってくる！」

そして、必死で止めるキグヌスを振り切って、遠い遠い太陽の神殿へと、向かったのです。

+音変わり



6.

それ以来毎朝、キグヌスは、東の地平線の果て、朝焼けに光り輝く太陽の神殿を眺めてはフェートンの無事を祈っていました。

フェートンがたった一人であんな遠くを目指しているかと思うと、キグヌスの胸は張り裂けそうだったのです。



7.

一方、歩き続けて、ようやく太陽の神殿にたどりついたフェートンは、父アポロンに、訪ねてきたわけを話しました。

神の子が、うそつきと呼ばれてはアポロンも放ってはおけません。

そこで、

「なんでも望みの物を与えるから、それを証拠にすればよい」とフェートンに約束しました。

ところが、フェートンは、アポロンの乗る太陽の馬車を貸してほしいと、頼んだのです。



8.

太陽の馬車は、とても少年が乗りこなせるようなものではありません。

しかし、神様が嘘をつくわけにもいきません。

アポロンは、渋々、1日だけ、馬車を貸すことを承知したのでした。

+音変わり



9.

「あれは、フェートンだ！」

その日、いつものように太陽の神殿を眺めていたキグヌスは、躍り出た馬車を操っているのが、フェートンだと、すぐに気がつきました。

「ああ、なんてことを・・・

神様、どうか無事に西の果てにたどり着きますように」



10.

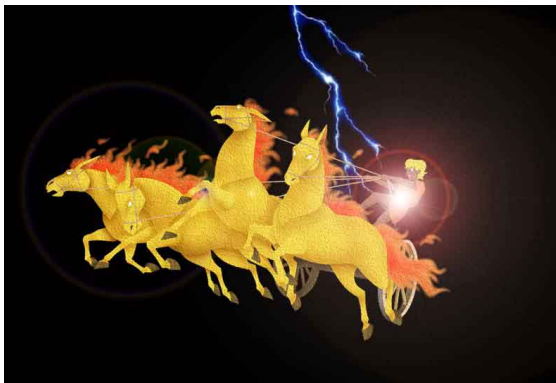
しかし、グヌスの必死の願いもむなしく、馬車が突然、めちゃくちゃな方向へ走り出しました。

馬たちが、いつもと違う未熟な乗り手に気づいたのです！

必死に、手綱を引くフェートンですが、とても馬たちをおとなしくさせることは出来ません。

太陽の馬車に焼かれて、あちこちから火の手が上がりました。

こうなっては、アポロンも放って おく訳にはいきません。

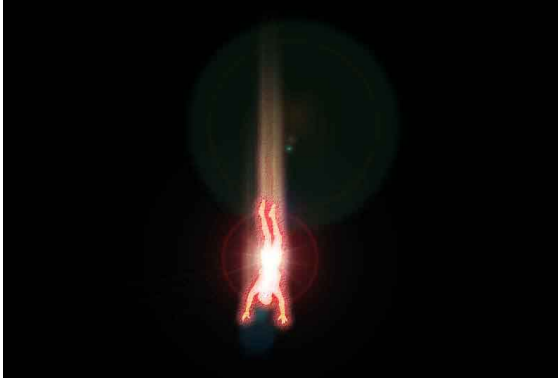


11.

「許せ！むすこよ！」

SE ピン！

+音終わり



12.

フェートンは、一筋の光となって、エリダヌス川に落ちていきました。

+音始まり

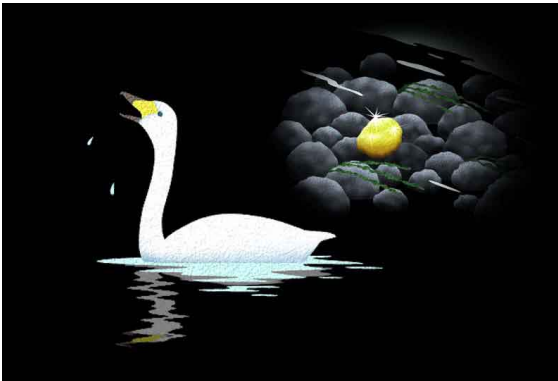


13.

「フェートン!、フェートン!」

キグヌスは、川に入って必死にフェートンを探しました。

その手に、あの青い小石を握ったまま、潜っては顔を上げ、辺りを見回し、またもぐり・・・・。



14.

いつしか、美しい白鳥に姿を変え、それでも、探し続けるキグヌス。

そして、やっとの事で見つけたのは、水の中にきらめく黄色い小石だけでした。

+音変わり



15.

キグヌスは、友情の証の小石をくわえて大空に舞い上がり、はくちょうの星座となりました。

今でも、キグヌスは、フェートン探しをやめません。

そして、くちばしには二つの小石が、二人の心を表すように、永遠に美しく輝いているのです。

+音終わり